

令和俳句論考

廣瀬 茂雄

腹の泥乾いてゐたり孕鹿
教へたる道違へ行く黒日傘

森岡 正作

(第四句集「鮎の川」より)

作者はあとがきで、「今は型を決めずにどんな対象でも素材でも自由にのびのびと詠んでみよう」と述べている。確かに本句集には多彩な句が並び、楽しみながら読むことができた。

一句目、新しい命を宿している鹿の写生句だが、人間のように妊娠で特別な扱いを受けるわけでもなく、自然の中で子を孕みながら生きていかねばならない。雨が降り、ぬかるんだ場所を体を休めざるを得ないこともあるのだ。客観写生に徹しているが故に、孕鹿の逞しさも感じさせてくれる句だ。

二句目、道を尋ねてきた相手に正しく教えられたかどうか心配で、見届けた経験がある方は多いだろう。正しく伝わったことがわかれば安心するが、逆であれば気持ちは複雑だ。自分の教え方が悪かったか、或いは相手が早とちりしたのか。そんな時は、少しでも目的地に近づいていればいいかと、自身を納得させるのだが……。少し苦みが混じるユーモアのある句だ。

氏は「出航」主宰・「沖」副主宰

蝦夷富士の空一枚を尾白鷺

源 鬼彦

鮭遡上六尺ほどの川幅を

(「源鬼彦全句集」より)

作者は令和二年五月に七十六歳で急逝された。没後五年を経て既刊六句集を中心に編まれたのが本句集だ。硬質感のある句がなれば、朔北の地北海道の雄大さと自然の厳しさが伝わってくる。

一句目、富士山同様コニーデ型の美しい山容を持つ羊蹄山は蝦夷富士とも呼ばれる。雲ひとつない広い青空が、切り分けられない景として眼前に広がっている。そんな空を尾白鷺が悠々たる様で飛んでいる。北の大地は大きく、物音すら聞こえないようだ。

二句目は一転して足下の景。鮭の川への遡上は映像でしか見たことがないが、産卵のために外洋から自分の生れ故郷の川を目指して戻って来る。句の景はかなり上流だろう。六尺は二メートルにも満たず、鮭の成魚は二尺あまり。ひたすら産卵場を目指す。飾り気のない写生句だが、鮭の悲壮感も伝わってくる。

氏は「道」前主宰

足元を店の猫ゆくかき水
たんぼぼのまあるい絮へぼつと雨

大崎 紀夫

(第十三句集「耳草草」より)

氏は元朝日新聞社社員で「俳句朝日」の創刊編集長だった方。二〇〇四年に第一句集を上梓してから、これが十三番目の句集となる。飾り気のない、軽快な句がならぶ。

一句目、懐かしい昭和の光景だ。昔風の三和土のある、ごちんまりとした軽飲食の店だろうか。猫の話題で客と店主との距離が縮まる、そんな下町のさりげない情景も見えてくるようだ。

二句目、瞬間を見事に捉えている句である。蒲公英の柔らかな白い球状の絮の中に雨が入り込んだというのである。「ぼつと雨」

とは、降り始めのひと粒に違いなく、この雨の行方が気になってしまふ。絮の表面が雨粒を支えたのか、或いは中を貫いたのか……。絮に入り込んだ雨のその後も想像したくなる句だ。

氏は「やぶれ傘」主宰・「棒」同人

鵜さばきの舟べりほどに頭を低く

山田真砂年

逆鱗のごとき枯葉の脆さかな

（第三句集『夜は昔の』より）

あとがきで作者は、「俳句は言葉ばかりが先走らず、実感を大事に詠みたい。虚構を描いても、そこに実感が宿り、リアリティーが滲むような俳句でありたい」と述べているが、至言と思う。

一句目は、「鵜飼五句」と前書きのある五句の内の二番目の句。篝火から火の粉が舞い散る夜の鵜舟を詠んだ最初の句の次に続いている。鮎を捕まえた鵜を舟べりに引き寄せ、鵜匠が吐き出させている光景を詠んだものだろう。「頭を低く」の措辞で鵜と鵜匠との一体感がリアリティをもつて伝わってくる。

二句目は感覚が前面に出た句。枯葉の脆さは当然のことだが、それを「逆鱗のごとき」と言い切ったところに作者の感性が光る。握りしめた枯葉を潰す時、植物の最後の抗議の言葉として確かにこの言葉は相応しい。

氏は「稲」主宰

海昏し鰯網に賭す能登漢

木村 内子

角が立つ智は衰へて漱石忌

（第一句集『金平糖』より）

作者は現役的眼科医時代に患者だった方の句に感銘を受け、短い文字数で自分を表現できる俳句の凄さに心を打たれ、七十近い

歳で句作を始めたとのこと。改めて俳句という短詩形文学の力を感ずる。御歳八十三歳、まだまだお元気で活躍されそうだ。

一句目、この句の前が自身の医院を閉じた感慨を詠んだ句だが、現役から身を引く自身とは対極にある光景を詠んだ句だ。鰯漁に賭ける能登の若い男衆への共感と応援。「鰯網に賭す」が力強い。

二句目は、夏目漱石の「草枕」の冒頭に材を取った句。直球的な忌目句だが、昨今のご時世への作者の慨嘆と警鐘の句と見た。

「角が立つ智が衰へて」住みやすい世になったかと言えば、逆だろう。理性を疎かにしてしまふ世の中は淋しいものだ。

氏は「天晴」会員 「姫沙羅」選者

風花や素手にて磨く杉丸太

松本 節子

法話聞く阿闍梨の部屋の春炬燵

（第一句集『塔一つ』より）

作者は今年九十歳を迎えた京都在の方。句集には京都だけでなく近在の地域を詠んだ句がならぶ。

一句目、京都市北部の山で植林されている北山杉は床の間の柱などとして使われることで知られる。杉の皮を剥き、乾燥させた丸太をかつては砂を使い、女性が素手で磨いていたのである。風花が舞う寒い中の作業は大変だろうが、何か澄んだ景でもある。

二句目、阿闍梨（あじやり）とは密教を学んだ僧のこと。法話をする立場であればそれなりの厳しい修行をした方だろうが、そんな阿闍梨も日常の寒さは別物だろうか。春は到来したもの、炬燵は手放せないのである。俳味を感じさせてくれる一句だ。

氏は「雪解」同人

（筆者住所 〒444-0842 愛知県岡崎市戸崎元町九一七）